

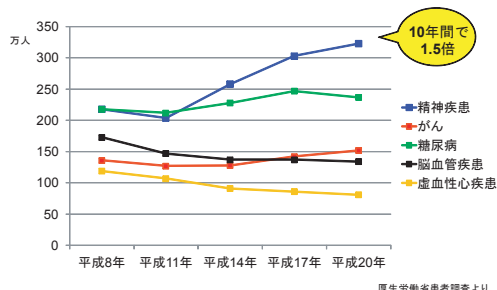
- ・身近な心の病、
厚労省「5大疾病」に
- ・更年期の患者さんと
接する中で感じること・・・
- ・パリの旅

身近なこころの病、厚労省「5大疾病」に

～産婦人科医療の立場で今何が問われているか～

村口きよ女性クリニック院長 村口喜代

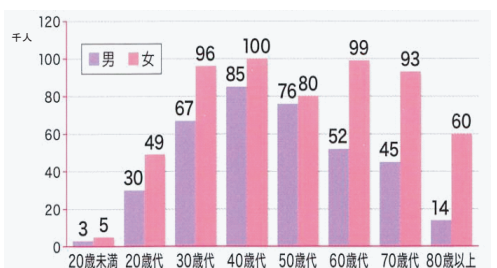
傷病別の医療機関にかかっている
患者数の年次推移(図1)



「4大疾病」から「5大疾病」へ。平成25年度は、厚生労働省が地域医療の基本方針となる医療計画に盛り込むべき疾病として指定してきた、がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病の4大疾病に、新たに精神疾患（うつ病など）を加わった年となった。

「5大疾病」とは、厚生労働省が対策に重点的に取り組むべきとして指定した疾病であり、患者数が多く緊急性が高いなど、一定の条件を満たす疾病に対して打ち出す医療政策の基本です。医療計画は、都道府県が作成するもので、多くの都道府県では今年度以降の医療計画に反映される。

うつ病・躁うつ病の男女年齢別総患者数
(2011年10月)(図2)



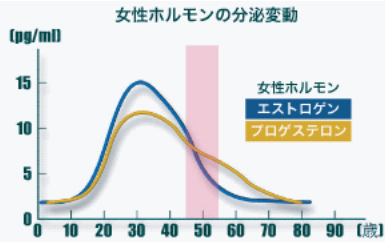
5大疾病の患者数のうち、精神疾患の患者数は10年間で1.5倍に急増している(図1)。他の4大疾病は微増・減か横這いです。うつ病の生涯有病率は、女性が男性より高く、約2倍との報告が多数あり、有病率の性差は国際的にも普遍的である。男女年齢別の総患者数は、年齢が上がるほど性差は著しい(図2)。

加茂登志子氏(東京女子医科大学附属女性生涯健康センター所長)によると、「うつ病はその精神疾患のなかでも急増しており、患者のうち女性の占める割合は生涯罹患率や有病率から推し量ると6～7割にも及ぶ。この数字は、国民の医療と健康に取り組むものにとって、性差を改めて意

識し、取り組む姿勢を整える必要性を十二分に訴えるものである。4大疾病では、全て男性の罹患率が高かった。**5大疾病元年は、地域医療における女性医療元年である**という。

月経前症候群PMS、月経不快感分障害PMDD、マタニティブルー、更年期障害としての抑うつ症状など、毎日の診療でよく遭遇する訴え・症状です。女性は妊娠・出産の性役割を担っているがゆえに、うつ病など精神疾患の誘因、危険因子を持っていることはよく知られている。また「性別役割」意識の強い日本社会・ジェンダー問題、ライフサイクル上に生じるさまざまな心理的・社会的要因も重くのしかかる。女性の生きにくさ、身を持って体験してきた一人の女性医師として、私は1999年6月当クリニックを開院する際に「女性に優しい、女性が元気になるクリニック」を目指した。たくさんの女性に出会い、たくさんの貴重な話を聴き、女性の生き様、悩み、嘆き、怒り、強さ・・・に触れ、時には共感し癒された。開院14周年を迎えた今、初心に立ち返ってみななければならないと思う。この10年、社会環境も女性の生き方も大きく様変わりし、一方で心の病を抱える女性が急増しているという現実、そのことを重く受け止めなければならないと思う。産婦人科医療を荷う立場でも、うつ状態など心の病・症状に向き合う姿勢が問われているのだろう。

更年期の患者さんと接する中で感じること・・・ 看護師主任 小林美和子



女性は、妊娠・出産の性役割を担っていることにより、小児期、思春期、性成熟期、更年期、老年期とそのライフステージにおいて、女性ホルモン（エストロゲン）の変動にさらされており、普段から心身の不調を感じやすい。特に更年期に入ると、エストロゲンの急激な減少によって、加えてこの時期に抱える家庭内、工作上、人間関係などの悩み・ストレスにより、何かしらの不調を感じる方が多くなります。その感じ方・症状には、個人差があり、軽い方もいれば、日々の生活を送るのも困難な方もいらっしゃいます。それは、とても苦痛なことだと思います。

当院では、更年期の体調不良で受診された患者さんには、更年期の間診票に記入していただき、その間診票をもとに医師の診察の前に、予備問診をしています。すぐに医師の診察を受けたいと感じる方もいらっしゃると思いますが、特に更年期障害の訴えで受診される方は、それまでの過程が長い方が多く、そのような方法をとっています。そこで患者さんの訴えに耳を傾け、医師に伝えるのが私たちの役目です。

お話を伺っていると、夫や子供のことで悩みを抱えている方や、自分の親や舅、姑の介護、友人関係、仕事のこと、老いへの不安・・・など多岐にわたり、何らかのストレスを抱えている方がほとんどです。時には、涙を流しながら訴える方もいらっしゃいます。症状としては、のぼせ、ほてり、汗をかきやすい、（まわりの人は、平気なのに自分だけが大量の汗をかいているなど・・・）、冷える、疲れやすい、眠れない、などが上位を占め、その他めまい、動悸、イライラ、くよくよ憂鬱になる、やる気が出ない、気持ちに体がついて行かない・・・など、また他科を受診しても特に異常ないと言われたと訴える方もいます。このような症状の中には、更年期障害ではなく、他に病気が隠れていることもありますので、異常がないことの確認も必要です。

お話を伺いながら、まだ更年期の時期に達していない私が、どれだけ患者さんの力になれているのだろうか・・・と、申し訳ない気持ちになることもあります。しかし、お話を聞いた後に、「聞いてもらって気持ちが楽になりました」と言ってくれる方もいますので、私でも少しは役に立っているのかなと感じホッとします。私は、医師への報告で特に気を付けていることがあります。それは、患者さんの訴えをなるべく患者さんの言葉で伝えるようにしていることです。自分の解釈を入れてしまうと患者さんの訴えが違う形になってしまうかもしれないからです。皆様がQOL（クオリティ・オブ・ライフ）を高め、よりよい日々が送れますようお願いしております。これからも、どうぞよろしくお願い致します。

パリの旅 “堂々たる文化” に触れて

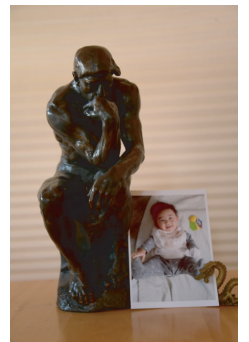
坂総合病院名誉院長 村口 至 先生

リモージュ（注）のホテルからタクシーで40分ほど、朝もやの中を走るとオラドル村の記念館の門前に着いた。大きくもない半地下の記念館のロビーを抜けると旧村へ通ずる道がある。もやの中から崩れ残った建築物があらわれる。空爆も伴ったかのように皆屋根がない。室内には、錆びたミシンやベッドの残骸が放置されており、70年前の生活の名残を示している。パン焼き窯に、人間を詰め込んで火を放したという跡もあるはずだ。道路にタイヤもガラスもなく錆びて放置されている乗用車は医師の往診車か。歯科医の看板は確認できる。錆びた電車の軌道もそのまま。遠く教会の鐘の音が伝わってくる。広い墓地には、大小様々な墓が並んでいる。小さな十字架やロザリオが添えてある。わずかな土の盛り上がりで墓と確認できるような、風化した墓もある。村中の人々が集められ外から鍵をかけられ火を放たれた教会は、新築されているようだ。

ここは、1944年6月10日に、ナチス独軍に急襲され村中が焼き尽くされたフランスのオラドル村です。どうしても、この目で確認しておきたかった願いが、この5月連休に実現しました。同行者はパートナーの喜代所長とその姉夫婦です。その義姉は、「お母さん助けて」と叫ぶ子供たちの声が聞こえるようで胸が痛いとつぶやく。村内を1時間も歩くと霧も晴れてきたが沈鬱な気持ちで足も重い。「ひとは斯も残酷なことが出来るのか。」と幾度もつぶやいていた。そのうち、「お前の国もやっていただろう」との内なる声が聞こえてくる。確かにそうなのだ。でもこの国は、あったこともなかったかの如くにしてしまうことが許される。なぜだろうか。他国を戦場にすることで悪事に向き合えなくしたからだろうか。（注 リモージュ：パリから列車で4時間の地方都市）

フランスの市民革命で破壊されたヴェルサイユ宮殿は、復元され絢爛豪華なさまを示している。古ぼけたシャンソンのライブハウスは、革命当時牢獄として使われたところで、ギロチンをそのまま残している。史実をそのまま残し、後世の人々にも評価の機会を残すという“堂々たる”文化を感じる。

初孫を抱くとこの子に何を伝えられるだろうかと考える。オルセー美術館の売店で、絵本等のグッズを探すもいまひとつ、ふと見上げるとロダンの「考える人」が目に入った。これを座右に置くとどんな人格になるかと思い、機内に運び入れた。



臨時休診

○ 8月15(木)～18日(日)はお盆休みのため

○ 8月30(金)～31(土)日は研修旅行および第32回日本思春期学会参加のため

休診となります

発行元：村口きよ女性クリニック

<http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp>

e-mail: con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp

